松原市立松原第二中学校　進路通信

HOPE

No.４６

平成29年2月3日

合格答案の書き方

高校入試を間近に控え、実際に入試に携わっておられる私立高校の教科担当の先生方から受験生のみなさんに、合格するための答案の書き方について、アドバイスを紹介します。是非とも参考にしてください。

入試全般について　＜大阪信愛女学院高等学校 教頭 上田教雄 先生＞

中三の皆さん、間近に迫った高校入試をめざして毎日勉強に励んでいることと思います。そんな皆さんに合格へのアドバイスとして、答案の書き方について述べてみることにします。

第一に、受験番号や氏名をはっきりと記入しましょう。読みやすく書くこと。これが答案づくりの基本です。ＨＢなどの鉛筆で、濃く大きく、丁寧に書きましょう。消しゴムを使う時は、確実に消して下さい。

記述式の答案を書くにあたっては、たとえば「織田信長」を「お田信長」と書いたのでは得点になりません。日頃からの「書く」勉強が必要です。

解答欄を間違えるケースも時々みられます。設問の指示を見落とさないよう、落ち着いて取り組みましょう。次に、ふだんどのようなことに気をつけて勉強をすればよいのでしょうか。

公立に比べて私立の問題は難しいという声をよく聞きます。確かに私立入試は問題量も多く、設問もひとひねりしていることがしばしばあります。でも、教科書をしっかり勉強し、それを土台にして学力を磨いておけば恐るに足らずです。ただし、学校によって出題傾向に特色、個性のようなものがありますから、市販の過去の入試問題のまとめなどを活用して志望校の出題傾向やその特徴を調べておくことが大切です。要するに志望校を中心に、私立高校の過去の問題に慣れ親しむことが、合格へのカギともいえます。

国語や英語では長文の出題も多く、論理的な読み取りができているかどうか、即ち文章を把握する力が試されます。長文を見ただけで投げ出さないで、ゆっくり、しっかり読むくせをつけておくことです。そして、読んだり聞いたりしたことを常に30～50字程度でまとめる習慣もつけておいて下さい。新聞のコラムを毎日読むことも、文章の「起・承・転・結」が分かるようになり、実力向上に役立つでしょう。

以上、合格答案づくりの要点を列挙しましたが、これからは実力を十分に発揮できるように健康に気をつけ、ベストコンディションで試験に臨むことが何よりも大切です。ご健闘をお祈りしています。

国語について　＜清教学園高等学校　国語科教諭　二村　純 先生＞

問題作成者の意図を読みとろう

高校受験生のみなさん、国語の入試問題を作成し採点する私たちにとって、問いは大きく二種類に分けられます。それは、「ことばの知識をたしかめる問い」と「読解をとおして、ことばを使う力をたしかめる問い」です。

前者は漢字の読み書き、語意、慣用句、四字熟語、作品名などを問います。知識を問いますから、正しく知っていることを示すことがポイントです。漢字の書き取りでは「はねる」「とめる」「つきぬける」などがあいまいだと、減点や誤答とします。また、しっかり身につけてもらいたいのは訓読みです。

後者は、内容読解の問題です。設問の形式は、選択、抜き出し、条件付き記述などバラエティーに富んでいます。みなさんも、設問中の「本文のことばを使って」、「～字以内で」などの条件指示が正解へのヒントであることはご存知でしょう。ですから設問は注意深く読まなくてはなりません。ときどき、注意深さを確かめるため、「適切でないものを選べ」と意地悪な問い方をする場合もあります。

問題文の内容読解にもっとも時間をかけるのは、問題作成者です。作成者は文章をこまかく分析して、小説ならば「行動」と「心理」、論説文ならば「事実」と「主張」などを整理します。そして、同じ内容の言い換えがあるところ、比喩的表現、理由づけ、具体例、変化が起こったところ、原因と結果の関係などが正確に読み取れているかを問います。そういう意味で、作成者と同じように正確に、しかもはじめての文章を限られた時間内に内容読解できるかが、「合格」「不合格」の分かれ目になります。その読解内容を、問題作成者と受験生が書きことばでやりとりをするわけです。一種のコミュニケーションと考えられます。傍線部をじっくり読むうちに、なぜここに設問したかが見えてくれば、あなたは作成者と互角の勝負ができます。

このとき、特に「あなたの意見を述べなさい」というのでない限り、「自分のことばで…」と指示されていても、皆さんの個人的意見を求めているわけではありません。書かれていることばどおりを、常識的に考えることが必要です。

記述の答案作成には、型と組み立てを意識してください。「なぜか？」と問われたら「～だから」、「どういうことか？」と問われたら「ということ」と文を終えるのが型です。次に組み立てですが、記述内容を考える際には、もっとも簡潔に書くならばどう答えるか、つまり答案の柱がなくてはなりません。私たちが長文記述を採点する場合、それがあれば六割以上の評価をします。つづいてよりよい答案にするには、根拠づけをする、「～ではなくて」と記述内容を明確にするために工夫する、どういう範囲で言えることかを押さえる、など設問によって要素を付け加えてゆきます。すると、矛盾した内容や、主部と述部が対応しない文になることがあります。そこで、複雑なときは、単文を接続詞でつないでください。

あと数カ月ですが、以上のことを日ごろから意識して練習すれば、国語以外の教科にもいい影響が期待できます。

悔いの残らぬ受験勉強をしてください。